
火の鳥 少年編

加来間沖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

火の鳥 少年編

【Zコード】

Z0230Y

【作者名】

加来間沖

【あらすじ】

時は20××年。

1人の少年がある朝外に出た。すると光が空を覆った。
少年がそこで見たものとは？

人は何のために生きているのか？

火の鳥＝少年編＝？（前書き）

今の人間の内、何パーセントの人間が生きる意味を分かっているのだろう？

火の鳥＝少年編＝？

20××年…。

この物語は終わりから始まる。この世の終わりが来たのは実に2日前。

土曜日という日は部活をしていない中学生の自分にとつては、とてもうれしい日だ。今日急げてもまた明日ダラダラできるのだ。何の考えもなしに家から出たこの少年は山下竹一（14）で、そちら辺にある中学に通学している、普通の中学生だ。

この日はとにかく暑い。自分がナメクジなら干からびているだろうし、その前に塩分をさがし求め自害しているかもしない。どちらにしろ屍化しているのは火を見るより明らかである。そんなことを考えていると突如、盲色になるんじゃないだろうかと思うほど光が空を覆った。周りのものが分子レベルで破壊される様な錯覚に陥っている。目が回る。体が溶けていく…。

ドッ…鈍い音がした。頭を金属バットでぶん殴つたらこんな音がするのだろう。とにかく痛々しい音が聞こえた。自分という固体が人間の形を成していると分かつたのは、体のいたるとこがヒリヒリ痛んでいるからだ。

「大型トラックと衝突したのかな…」 独り言をいい目を恐る恐る開いた。…何も見えない。

田を閉じてまぶたを指で擦つてみる。何かが刺さっているという感覚はなく、普通に本来の働きをしていると判断した自分は、暗いところにいる意味を解明しようと思つたが何もできないし分からない。

田の前に炎のような輝きを感じた。いや氣のせいではない。それ

を鳥の姿をしていた。

「一体どうなつてんだか」と呟くと「分からなくて当然よ」鳥が喋つた。

まさかこれが火の鳥。話を聞いたことがある太古の昔からいて絶対に死なず、その血を飲めば永遠の命をが得られる。これがその鳥か。

「僕はどうなつてんですか」「あなたは死んだのよ。でも大丈夫あなたは生き返るわ」そう言つとその鳥は暗闇の向こうへ飛んでいつた。

「待つて」ハツとなつて僕は布団から起きた。「夢?」

しかしどうも変だ。ここには自分の部屋じゃない。いかにも古臭い家だ。

…体を起こすとそこには1人の男がいた。

「目が覚めたか」その男が振り向いた。それは鼻がでかく蜂に刺されたようにブツブツができていた。「どうだ気分は」そういうと男は僕に汁のような物が入つた茶碗を目の前に置いた。

火の鳥＝少年編＝？（後書き）

どうも加来間沖と申します。

まあそのまんま原作は火の鳥です。

勝手に名作を自分風に書いてみることにしました。そんなのが嫌いな人は見ないほうがいいです。

そういうのが、おくな方は見ていただけたら幸いです。

火の鳥＝少年編＝？（前書き）

突如光に包まれた少年。
彼が行き着いたのはある男の家だった。

火の鳥＝少年編＝？

「まあ飲め」その男は俺の前においた茶碗に指を刺していった。
僕が一口のんだけを見て、

「おまえさん、あそこで何をしていた。そうだ名前は？」

「僕は山下です。……」そこで言葉が詰まつた。まずここがそこか分からぬしこの男が何物かすら知らない。それどころかさつき光のようなものに包まれて…。ウツ。

僕はそれから先を思い出そうとした瞬間強烈な吐き気に襲われた。
「おいおい大丈夫かい」男がよってきて背中をさすつた。

少し楽になつたからさつきの問いの答えを述べた。「よく覚えて
いません」

男は少し驚いたような顔をした。まあ記憶が無いなんていつたら
そりやあ驚くか。

「お前さんも政府の犠牲者か……? 何のことだ。政府が何だつ
て?」

「理解出来なくとも無理は無い。今は寝てろ」といわれたので僕
は茶碗に入つてた汁を飲み干すと再び眠りに入った。なぜかとても
眠かった。

……。幾時間寝ただろう。部屋は暗い。さつきの部屋に電気は無かつたから部屋を移されてなかつたら、僕はさつきの部屋で寝ていて夜になつていた。

「あのー」僕はいかにも寝起きですといふ声を出してさつきの男の人を呼んだ。そいえば名前を聞いていなかつた。

数分して俺は男の人に誘導されトイレに行き再び元の部屋に戻つた。男の人は”托元猿彦”（たくもとさるひこ）といふらしい。たぶん僕の知識では漢字で書けないだろう。

僕は仮眠をとつて朝を迎えた。

家から出でみた。家中とは違つて随分新しそうな家だ。とりあえず自分の家の近くでないことは分かつた。こんなところ來たことが無い。しかし周りに立つてゐるのは別段変わつたところの無い2階建ての家で遠くにビルが見えるし、猿彦さんも日本語をしゃべつてゐるためすくなくとも外国といふことではなさそうだ。

家に戻ると猿彦さんは朝食をくれた。ご飯と昨日の汁と豆腐だ。変わつた朝食だなと思いながら礼をいい食べた。

食べ終わると昨日の話しが行われた。どうも分からぬ。「地図をみてください」まずは場所から話すこととした。地図を見た。パット見て普通の地図だがどうもおかしい。地名が変なのだ。僕が住んでいたのは山口なのだがそこは長門と記されている。

不思議に思いながらも長門と記した場所に指をあてた。そして長門の詳細地図を見た。

やっぱり変な地名がある。だが知つてゐる場所もある。幸い僕がいたところは同じだつた。

「Jの下関市です。

男は目を細くして「もつと細かい地図をとつてこよつ」というと本棚から取り出した。なぜそんな地図があるのだろう。僕はあて

のならない地名交じりの地図で探して探ししまくつた。そして地形から大体の場所を割り出した。

「そこはここ付近だぞ」男はよかつたなといわんばかりの頬もしい顔をした。僕は見覚えの無い風景を不思議に思つたが混乱していく周りの建物のことを忘れてしまつたのかなと思い喜んだ。

しかし、あたりに僕の家は無かつた。

火の鳥＝少年編＝？

「お前さん本当にここ住みなんだな」「はい山口県です」「あんまり大きい声で言つなよ。政府に聞かれたら厄介だからな」

猿彦さんがさしているのは山口県とかかれている地図だ。猿彦さんの話によると10年ほど前地名も何もかも政府の革命で変わってしまったらしい。

さらに政府は社会保障制度に支出する金額の割合を35パーセントより13パーセント減少させた。そしてやつてはいけない身分制度までつけたのだ。低いのから 民 士付属民（士民） 士 貴族 貴士 王族の6つの身分に分類した。

一番低い民とは農業をしていたり年収が低い世帯を民として扱つた。士というのは軍である。2年間かけて社会保障制度の10パーセントをまわしこみ陸軍を90万より120万に増強した。また海軍、空軍、独立海軍直属陸軍（愛称：海兵隊）総員150万名それを士という。そしてその士が減少したときの補佐役としてある程度の年収がある一般市民を士民といつ。貴族とは大会社の企業の上の部分の人たちのことで、貴士とは士を直属におく権利を持つ富豪で、王族とは大臣などの100名ほどだ。

割合をいうなら民3割2部 士民6割 士4部 貴族3部 貴士・王族1部以下という感じだ。

医療制度などの基本的なものが受けれるのは士民以上である。普通身分制度というからして一番下の「民」が少ないというイメージがあるが、3割2部の人口も医療制度が受けれなければその分の金が浮く。

「民」は異常に貧しい生活をしているのだ。そう考えると3割2部とは多いと考えて不思議である。

何故ここになつたかといふと地震で工業地帯が壊滅したためである。そのためリストラが進み「特別措置法」でこのようになつたのだ。

猿彦さんはこのうちの土民にあたるようで最小限のものは受けれるそうだが、この政治に疑問を感じ敵対視さえしている。

ちなみに地名が変わったのは県などの利益がなんやらかんだで猿彦さんの説明じやあよく分からなかつた。

「そしてお前は恐らく政府の犠牲者だ。いやそうだ。そうだとしか考えられない」猿彦さんは話し始めた俺がこの世界に来た理由そして、リストラが進む一方で軍隊に社会保障制度の金をつき込まれ膨張している理由を。

火の鳥＝少年編＝？（後書き）

とりあえず序盤にあたるところが終了しました。
お気に入りに入ってくれた方ありがとうございます。

火の鳥＝少年編＝？（前書き）

すいません短いです。

火の鳥＝少年編＝？

「IJの国は数年前まで戦争をしていたんだ」猿彦は話し出した。

「4年間続き軍がたくさん死んださ」

「勝ったんですか」気になつたので聞いてみると、猿彦さんは力なく首を横に振った。「いーや停戦状態なんだ。だからいつ戦争がはじめてもおかしくないって言つて軍をいまだ増強してるんだ」

「そして過去から人間を送り込んで洗脳し軍隊にする実験を行つたんだ」と遠くを見ながら、というより僕を見ないようにいつた。

僕は何か気持ち悪い感覚にとらわれた。「つまり…僕がそうなんですか」「ああ…」猿彦さんが遠くを見ながら答えた。そして僕に視線を向けながら「やつら記憶を完全に消して転送し、命令を忠実にこなす軍を作つてゐるらしい。お前もその1人になるはずだつた」数歩近づいて「だがお前は記憶がある。何故だ?」そんなことを聞かれても分からぬ。

猿彦さんはしばらくしてまた別の地図を取り出した現在の基地だ。みると民、士民、それ以上の領域に分割されているのである。“正當なる壁”何が言いたいのか分からぬが地図上にそういう書かれている壁が3つの領域に分けているのである。

「IJのが今のこの国の制度だ。上の位のやつと下のやつは基本的に生活場所が遮断されている。」「

僕はその日眠れなかつた。と言つた。ようつて別にどうでもいいような・・・すぐ寝れた。

そして次の日猿彦さんと近所の人が話している。近所の人が何を話しているのかかすかに途切れ途切れで聞こえた。「もう我慢ならねえ……あの壁を……でもって……土なんかふき跳ばせ……」なにやら物騒だな。

猿彦さんは僕のところに来て「俺は明日より近所のやつらと共に士に対し反乱を起こす」…ん?「なんですか」「殺されたんだ人が士のやつらが殺したんだ。30人も」「さあ・・さんじゅうにん?ですか!」思わず大きな声を上げてしまった。

「ああもうこの声が政府に聞こえていようがカンケイねえ。土を叩きのめして、政治と戦うままでよ」

革命戦争が始めるのは明らかだったが僕には何も出来なかつた。

火の鳥＝少年編＝？（後書き）

士との戦闘を宣言し、腐った政治を叩きのめす革命が今起ころるー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0230y/>

火の鳥 少年編

2011年11月21日11時37分発行